エゾトウウチソウは，日高山脈固有種で，その分布域は山脈の亜高山帯峡谷，幌尻岳，ならびにヤオロマップ岳以南の高山を含む範囲にある（第3図）。生育地の環境からみるとこの植物は湿潤性の岩壁，岩錐地を好む。また，生育地の地質的な面では，この植物は日高山脈西側の神居古潭構造帯，日高前縁褶曲帯等の先白亜紀空知層群，神居層群の輝緑岩，輝緑凝灰岩，チャートの地域に特に多く，同山脈東側では先白亜紀日高層群の粘板岩の岩壁，時に第3紀の地質や川原にも生ずる。しかし，花崗岩やフォルンフェルスの地域では目下のところいまだ知られていない。

(2) ポロシリトウウチソウ（新雑種）

日高山脈幌尻岳の北カールの雪田の消えた跡には，8月中旬，タカネトウウチソウの美しいお花畠が展開するが，この群落のなかには，花が淡紅紫色のエゾトウウチソウとの中間雑種がみられる。エゾトウウチソウの生育地は主として峡谷の湿潤地であるが，幌尻岳の糠平川側では高山帯のカールにまで生育地を延ばしている。中間雑種は両群落の接点にみられ，その特徴は，花が淡紅紫色，雄蕊は花期後ただちに脱落し，花軸，花托筒には綿毛を散生し，葉形，雄蕊の長さは両者の中間的形態をとる。

終りに，本研究にあたってご教示頂いた北大農学部，伊藤浩司氏に厚くお礼申しあげる。

○オゼコウホネ秋田県に産す（望月陸夫）Rikuo Mochizuki : *Nuphar pumilum* (Timm) DC. var. *ozeense* (Miki) Hara from Akita Pref.

1971年6月，秋田県雄勝郡皆瀬村の通称木地山高原にある湖沼群の一つ，谷地沼で，柱頭盤の赤いオゼコウホネと考えられる植物を得た。山形県月山のものと比較し検討したところ，全体がやや大型であること，葉裏の毛が少ないこと以外は特に差異はなく，オゼコウホネと同定される植物であった。その後，現地で多数の個体を柱頭盤の色について観察した結果，ほとんど淡黄色でわずかに紅色を帯びる程度のネムロコウホネに近いものから深紅色のものまで連続的な変異が認められた。したがって母種ネムロコウホネから柱頭の色だけで区別されるものであれば，変種として取り扱かうことには多少の難点がありそうである。本地域はオゼコウホネの既知産地（尾瀬，月山）とネムロコウホネの産地（本州では八甲田山，八幡平，栗駒山）のほぼ中間に位置していることを考えると，柱頭盤の色の変異は興味深い。本植物は同年7月に谷地沼から数 km はなれた五才沼で，さらに8月には細沼において多数の個体が発見された。御教示いただいた東京都立大学の水島正美博士にお礼申し上げる。（秋田県立湯沢高等学校）

正　　誤 (Errata)

	頁 (Page)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
Vol. 46	373	20	f. *aberans*	f. *aberrans*